

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第14回『「少年よ、大志を抱け」

～ 新渡戸稲造 国際連盟事務次長就任 100周年 ～』

毎月定例の新渡戸記念中野総合病院での第3回新渡戸稲造『武士道』の音読会に参上した。筆者は、今は、廃校になった母校 島根県大社町の鵜鷺小学校の卒業式の来賓の挨拶『少年よ、大志を抱け』（1887年札幌農学校のクラーク博士の言葉）を強烈に覚えている。私の人生の起点であると言っても過言でなからう。その後、京都での浪人時代に 出会った英語の教師でもあり、牧師でもあった先生（東京大学法学部の学生時代に南原繁に学ばれた。）から、人生の機軸となる南原繁（1889-1974）との 間接的な出会いが 与えられた。そして、「内村鑑三（1861-1930）& 新渡戸稲造（1862-1933）& 矢内原忠雄

（1893-1961）」へ導かれた。英文で書かれた『代表的日本人』（内村鑑三）と『武士道』（新渡戸稲造）は、若き日からの座右の書である。悩める時に、いかに勇気づけ、励まされたことか。「1人で 部屋で 静かに1時間読書する習慣をつけよ！」と教わった。私は、19歳の時から、内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄の全集を読んだものである。現在、筆者は、『南原繁研究会』代表を仰せつかり、毎年11月3日「学士会館」で、シンポジウムの開催である。今年が7回目である。継続は大切な人間としての行為である。

医師になり、すぐ、癌研究会癌研究所の病理部に入った。そこで、大きな出会いに遭遇したのであった。病理学者であり、当時の癌研究所所長であった菅野晴夫先生（1925-2016）は、南原繁が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。南原繁には、ますます深入りし、さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本国の誇る病理学者：吉田富三（1903-1973）との出会いに繋がった。吉田富三は日本国を代表する癌病理学者であり、菅野晴夫先生の下で、2003年、「吉田富三 生誕100周年」記念事業を行う機会が与えられた。吉田富三の論文、著作を熟読し、これを機に、吉田富三への関心が高まり、深く学んでいくことになった。必然的に「がん哲学 = 生物学の法則+人間学の法則」の提唱へと導かれた。さらに、『陣営の外：「言葉の院外処方箋」=がん哲学外来』へと展開した。今年、新渡戸稲造 国際連盟事務次長就任 100周年 & 内村鑑三 没90周年 & 新島襄 没130周年である2020年に 3賢人の記念会が開催されれば、歴史的大事業となろう！